フォーラムニュース　Vol.20　2020　12/20

発行：フォーラム･子どもたちの未来のために実行委員会

http://www.f-kodomotachinomirai.com/

文責／大竹永介

【海外レポート特集】

新型コロナウイルス問題はまた新しい段階に入ったようにみえます。ヨーロッパでは感染の拡大がさらに勢いを増し、再度のロックダウンがつづいています。そこで、今月はイタリアとフランスに在住のお二人からの現地レポートをお届けいたします。（編集部）

①イタリアレポート

コロナ禍におけるイタリア人の愛と文句

佐藤まどか

春の第一波時、イタリア政府は予想外に厳しい対策をした。ロックダウン、自主隔離義務、ドローン偵察、マスク着用義務、そして罰金！　驚くことに皆おとなしく従った。普段ぶーたら言う事が多いイタリア人が、規則を守り、医療従事者に感謝の拍手を送り、窓からバイオリンを奏で、愛の歌を歌ったのだ。食事を施していた教会での集まりが禁止になったため、食べ物に困った人への食糧寄付が全国の道端で連日行われた。ボランティアだらけの国である。学校はオンライン授業に切り替わり、長い間、子ども達は友だちと会えない寂しさを味わった。ミラノの親戚の子の話を聞いていると、うなずくことが多い。オンラインで授業は受けられても、クラスメートとの小さな社会生活は味わえない。「みんなに会いたい」と、十歳の子は嘆いていた。私はニュースで高齢者施設のクラスターを聞いては泣き、イタリア人の愛を知っては泣いた。三分の一世紀も住んできて、この国の文化や自然は大好きだが個人主義的なイタリア人が苦手だった私は、考えを改めた。

しかし、コロナ禍に慣れて（あるいは飽きて）きたら、残念ながら元の木阿弥。皆、とにかく文句が多い。十月には、屋内外のマスク義務や夜間の飲食店休業令に対し、一部の大都市で激しいデモが起きた。いよいよ堪忍袋の緒が切れたか。さらに、クリスマス命！の国なのに、クリスマス直前から正月まで厳しいロックダウン措置をすると先日政府が発表した。故郷に帰ることすら禁止されるのだ。一部のイタリア人が文句を言って暴動を起こさないか、やや心配である。かくいう私も、イタリア人を見直したはずなのに、また文句を言っているのだから同じことか。

秋以降、イタリアは PCR 検査数をさらに増やし連日二十～三十万も検査しているとはいえ、夏の二百程度から二桁も多い感染者数だ。十一月のロックダウン効果で減っては来ているものの、収束には程遠い。しかし、イタリアでは死後検査が盛んで、老衰死や事故死、溺死でさえも死後検査で陽性だとコロナ死にカウントされるらしく、ワクチンビジネスの企みだ等、様々な噂が飛び交っている。もうなにがなんだかわからない。

とにかく、イタリア人の良さを知ることができた事、北部の悪名高きスモッグが一時的に消え環境を見直す機会ができた事、そして以前の日常がいかに貴重だったかを自覚できた事は、コロナ禍におけるメリットだったと思う。

田舎に引きこもって黙々と書く毎日は、コロナ前と殆ど変わらないが、出かけないのと出かけられないのでは気分的に違う。夏に一週間車で旅をしたのが遠い出来事のようだ。旅をしたり、誰かとマスクなしでハグをしたり、カフェでお喋りをしたり、本屋や青空市場で掘り出し物を探したり、コンサートや演劇に行ったり……。そんな普通の日々が愛おしい。そして日本が恋しい。

生きているだけでもありがたいはずなのに、人間、いや自分は、つくづく欲深き生き物である。

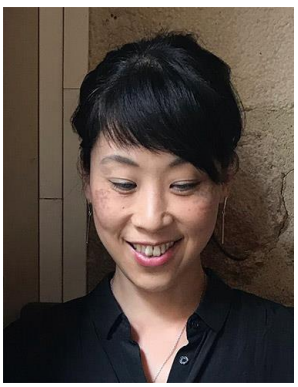
（さとうまどか：東京都出身でイタリア在住。『水色の足ひれ』（第 22 回ニッサン童話と絵本のグランプリ童話大賞/BL 出版）でデビュー。主な作品に『スーパーキッズ』（うつのみや子ども賞・講談社)、『つくられた心』(ポプラ社)、『アドリブ（あすなろ書房・日本児童文学者協会賞 / 児童ペン賞少年小説賞』など多数）

★つづいてはパリ在住のイラストレーター・絵本作家のたなか鮎子さん（写真）からのレポートです。

②フランスレポート

二度のロックダウンとノエル

たなか鮎子



あちこちにイルミネーションが灯り、パリにもノエルの空気が満ちてきました。店内でソーシャルディスタンスが守れるよう、総菜屋やパン屋さんの外には人の列ができています。人通りもロックダウン前に戻った感じです。私も、きのう市場でもみの木を買ってきて、引っ越したばかりのアパートにクリスマスツリーを飾りました。

11 月から始まった、フランス二度目のロックダウン。半月ほどは効果が出ず不安視されていましたが、月末になって感染者・重症者ともにぐっと下がってきて「やった！」という感じでした。12 月初旬からは、店内飲食をのぞくすべての店舗がオープンになりました。

ロックダウンによる経済的・精神的なダメージは大きいと思いますが、こちらの人々には、このくらいはっきりした方策が合っているように思います。「オールオアナッシング」というか、規制がなければどこまでもオープンにあけっぴろげに、規制があれば割と素直に「あ、はい」と切り替えるというか。なんといっても、春のロックダウン時の、あの「何が起こっているのか分からない」という得体の知れない恐怖感に比べれば、今回は全然気が楽です。病気の知識も、マスクや手洗いの意識も共有されて、皆さん落ち着いて過ごしているようです。

検査体制が整っているのもいい点だと思います。町の薬局の前にある仮設テントでは、無料で COVID のテストを受けられます。民間の保健所やかかりつけ医も、時間を分けるなどして患者に対応してくれます。感染者数が多いこともあり、フランスではコロナを日常の一部として受け入れる感じになりつつある気がします。

とはいえ、パリ市内がどこもおだやかなムードかといえば、そうではないようです。エリアにもよりますが、毎週土曜にはさまざまなデモが行われ、大小の衝突も起こっています。私自身は、もともと自宅にこもって仕事する生活でもあり、危険な体験をしたり、嫌な思いをすることは今のところありませんが、人との接触にはやはり気を使います。カフェや美術館が閉まっているのも残念。フランス語や陶芸など、やりたいことはいろいろありますが、まだまだ我慢。日本にもしばらく帰っていないので、和食も恋しくなってきました。

それでも、ある意味貴重な時間をヨーロッパで過ごさせてもらっているような気がしています。波のように押し寄せていた観光客が消え、本来の姿に戻ったパリの街。実はホッとしている現地の人も多いのではないでしょうか。人恋しいのか、微笑みあったり、挨拶を丁寧に交わす人々も増えた気がします。止まることなく高速で動いていた、これまでの生活の方がおかしかったのかもしれません。コロナが「加速しすぎた消費社会や、人間中心の生き方への警告でもある」と受け止めている人は多いでしょう。 いろいろな意味で、コロナは私たちに考え方の変換を求めているのかな、と思わずにはいられません。

（たなかあゆこ：絵本作家、イラストレーター。1972 年生まれ 。ロンドン芸術大学チェルシー校大学院修了。絵本『クリスマスマーケットのふしぎなよる』（講談社）、『ルナのたまごさがし』（フレーベル館）他、書籍装画『数学ガール』シリーズ、『人形つかいマリオのお話』等。JAGDA 会員）

●2020 年最後のフォーラムニュースをお届けします●先日、12 月 13 日に実行委員会を中心に学習会「日本学術会議問題がもたらす危険性とは？」（講師・山田健太専修大学教授）をオンラインで開催しました。コロナ禍でリアルの講演会などが出来ない状態が続いています。オンラインを含めてフォーラムもいろいろな試みをしていきたいと思います●次号ではコロナとの関わりについて、作家のいとうみくさん、工藤純子さんのお 2 人のエッセイを掲載予定です。●それにしても大変な 1 年でした。皆様お体お大切に、よいお年を！（大竹）